の令

度

会合

ŋ

Ŕ

め

に、

会

長昨

事

務

柴田 · を 取

さん

とが

1)

う 局 は

例

月

0

総

会 代 代 う 時 \mathcal{O} لح

で 理 ŋ

認 で

 \Diamond お

て

喜道

 \mathcal{O}

承

が

絶 V 子

えて

な

て、

き

0

ま

をの

 \mathcal{O}

弟

た

努

力

を

て

そ

試

4 流

う

事 5

実

を

知

5

さ

れ 重

た ね

斯

ょ

 \neg

る会員

有

志

方

 \mathcal{O}

を

得

要、 8

同 0

墓 々

後、

お

茶 て、 功 祖

行ない

が中お御

始向

を会

場

に、

義

太夫節

太夫を

 \Diamond 院

とす

る当

流

の芸

人たち 参加

> 績 竹

を 本

び

正

ょ

ŋ

ま

た至

座 前

11

の始

れ親

て

る

ŧ

 \mathcal{O} 至

な 極 \mathcal{O}

です

が

今

時 で 菓 住 偲 義

だ

け

集まる 11

を \mathcal{O}

減らそう

とい

こと

で、

会と

Ď

穏

な

雰

井

にわ懇

は気

や参かの

|先祭御代参の折に 義 太夫 師 の 御 告

義太夫協会会長 原 道 生

でも、 として、 る 紹 て 介をし 例 11 年、 ま は 春 規 来 7 私 模 < \mathcal{O} \mathcal{O} が おくことに L 0 0 コ 漢関係 た。ここで 祖 縮 計 口 先 小 画 祭は、 した祖先 等 禍 予定 セの 0 っため たしまし は 変 の秋 が 発のの \mathcal{O} 更 以 中 を 中 下 頃 件 余 止 ょ に 儀 う。 なくさ そ 両 0 延 太 き、 期、 夫協 玉 \mathcal{O} \mathcal{O} 例 れあ 口 御 会

が参 くと で、 も器 がか事 挨 赴 本ま に彼 L 出 実 らと 災拶を 女に 唯 き、 た。そこで、 で \mathcal{O} な 義 し 情 そして、 L は で 行 ところ 三十 た上 た。 太 いう が重なることとな きることと を 快く V 夫 いうこと してくるとい は 得 つも で、 事 を 分 いと その お、 材と 難 御 務 御 近 < た 的 遅 そ 本 本 止 11 了 \mathcal{O} で、 な手 す 手 な 当 う 柴 の 斯 終 体 \mathcal{O} 尊 年 年六月二日 む 承 ノことが 目 後、 了 卞 j なく当初 田 道 験 御 \mathcal{O} 状 て 0 はずを 広 うことに さんに、 を さ ŋ 態 け た \mathcal{O} 後 法 正 1 ŋ , て 先 に さ 面 1 ŋ 御 は に るうち 私 要 人たち 大分遅 は、 できたと 合 せ を に 本 住 な 個 動 聴聞 職様 に私一 ます 物 て 相 堂 御 整 \mathcal{O} 0 人 てし した次 さらに 子 境 都 えて \mathcal{O} 対の \mathcal{O} ただだい に 内 ま تلح 供 \mathcal{O} さ す 座 合 V 定 事 年 う もら 奥 ると は、 ま 養 各 せ 席 ŧ 祖 人 を す 情 末 うご よろ Ŕ 墓 E 先 が 変 0 多 塔 に て 第 時 カン カン などに は、 祭の 5 当 うこと 更 Ś 所 あ て 1 で 先 た 間 11 65, 5 Ĺ 参たう が が が 形 私 い の す。 方に 報 P る 0 御 \mathcal{O} \mathcal{O} そ は 代 楽 御 で 捻 \mathcal{O} お



義太夫協会会報 第112号

令和3年7月15日 般社団法人 義太夫協会 発行 〒103-0023 東京都中央区日本橋本町 3-1-6 日本橋永谷ビル 210 Tel. 03 (6265) 1880 Fax. 03 (6265) 1881 http://www.gidayu.or.jp

を

百三 絶えて 合れ 女曆 るそ うこと だ 加 2 後、 関し で \mathcal{O} て を 年 ち す 教 奏 Þ 語 たそ ベ き 賀 に + ĺ さ は 緊 発 興 な 授 太 0 義太忠なみに、 たと 夫に į **\ は、 لح て 掾 き た λ 恐 た \mathcal{O} 泉 張 足 余 \mathcal{O} て 鶴 年 らく たち三人の と 上 が \mathcal{O} 成 宇 た 越 で 1 下 感 後 行 が 田 果に 孝さ 꽢 自 う 演 想 を 間 夫 ぶ 草 治 演 1 近 昨 今 \mathcal{O} な 伝 近 わざわ うこと、 松門 5 目 再 因 に 義 像 覚えさせ ŧ 0 春 が ŋ Ш 加 貞 え 回 松 字二 太夫 たという に 4 を、 演さ さ 早 0 7 縁 対 な \mathcal{O} 0 賀 W 0 が、 新 作 ず 掾 左 抗 11 復 お 私 \mathcal{O} れ 11 Þ を 年 きさん 師 る 竹 ざ に、 しく 品 曲 を 月 作 心 義 て 正 今 衛 き に れ テー るこ でし 回 ŧ, 6 本 太 0) • 研 会 中 門 \mathcal{O} た を 本 品 \mathcal{O} 芸 は に、 座 経 拠 当 夫 大 上 報 再 究 員 で \mathcal{O} 抱 れ 11 術 Ŕ 六 の協 とも 地 時 告に と 11 ょ に 緯 節 坂 演 演 L 越 とし 竹 事 カン る 他 祭 八 う。 は、 た 事 と \mathcal{O} \mathcal{O} \mathcal{O} \mathcal{O} さ て 玉 柄 に 0 本 賞 いる千 五 って なく 前 百 で 7 態 Ł 京 第 を 道 他 れ 力 原 性 越 が ŧ 優 により、 たと あ は け で \mathcal{O} 都 創 頓 折 な 曲 津 者 爺 あ う 秀 ろうこ なの から下 は、 堀 \mathcal{O} 加 れ あ 始 L ŋ を 賀 伝 \mathcal{O} 賞 合 井 り 八者だっ ども、 するに もこ ŧ り、三年世・ 作 ま いう 寿、 初 上 賀 0 に 承 たと で、 かな 竹 せ を が 演 暦 西 L ん。 特 三途時 لح 坂 本 \mathcal{O} のた

准演寿

以に

(2021.7.15)

間

ナによる 開

公演 予定 に伴う午 してい の み Ó 後 開催 、 た 昼 八時以降の外 を行ってま 夜 となりまし 二回公演 策に 出 りまし 仏は、 いて た。 自 粛 緊急事 たが、 要 ŋ 請 返 カゝ 一月に b L 態 話 宣 言 尽 L

い義 危 てこの 険と判 また昨 たしました。複数人数で集まっての稽 太夫協会法人化五十周年 年度 七月に開催 断 からのコロナ対策 年 してのことでした。二度の 度 六月 から今年二月 の運びとなり 0 公演 に ま を 延 L 再 び期 延期 た。 延期 し 古 た を は

景事や掛け合いの演目を減ら

係

お ,客様の定員は今までの約半分とする

注 1意事 お客様 項 を記 にお名前とご連 した手紙をお送りする !絡先をお聞きし

チケット代は事前振込とする

チラシ 舞 検 舞台と客 温、 は 消 毒、 席 事 の間 前 マス に用意し 隔を四 ハク着 用 座 産席に 等をお願 1 置 いて いする ける おく

をお 最 願 前 V 列 ・する 0 お 客 様 点にフェ イスシー ール開 K 着 用

> 私 等 を 誕

...憩 時 間 を含め 十分な 換 気を す る

屋 $\overline{\mathcal{O}}$ 手伝 いの人数を最低限とす

る

客様 へのご挨拶を遠慮させ 食を伴う会合をひかえる て頂 <

ク ij 加 戸 ル 日 板 本 橋亭の を設 当 面 置 は 公演 公演 しており の終 では、 ま 演 を二十 す。 お客 様 との 時 لح

演

部

澤

弥

セ

六月公演

に 定 前 宰 足員に達 因 売 ŧ :家太 ŋ 開始とほ た名 し、 月二 曲 + ぼ 評 命 判も上 同 日今日 日 時に は (目) の ŋ 桜 におかげ 々でした。 太 宰の 忌 定 さま 期 六 気は 公演 月 6で予 + 絶 は 九 大で、 大太 約 日

ってみたい」との仲間の声を受け、足を向け代に下宿していた家が公開されているので行弘前市に観光に出かけました。「太宰が高校時一昨年の秋、東北地方の学校を巡演した折 てみた「太宰治 の男性が快く案内してください まなび の家」と呼ば まし れ る旧 た。 家。

説明を交えながら見せて頂いいが昂じて壁に数式を落書きを太宰が快適に利用していた 二階の自室、 学校 は 頂 百 大 戴すると、『津軽』 + の文科に三年 年の記念におつくりになった缶 に義太夫に凝 .利用していた様子や、:窓際の畳一枚分くらい いたのであるが、 ~って から V きしたあ 引用した「弘前 いた帰り た。」との が کے その な \mathcal{O} 学聞

た私 では 刷 は義太夫を λ んか。 、ださっ され ありま ・」とお伝 達は いるんで 感激 を「激や実し せ で

> きり 会 話 が 盛 ŋ 上 が ŋ ま

きな て が そ た お λ 楽しみくださったことと思 な れぞれに 経 義 緯 から企 太夫を語 紙治』『壺坂 画 る太宰の姿 L た今 口 を Þ 公 を - お 演、 声 を想 聴き お 像頂客

(公演

部

鶴

澤賀

太夫教室 七三 期 七

は門 越 孝) 東由 表会が行 受 コ 『仮名手本忠臣蔵』 鶴 三月一三日にスペー (講者 七三 1 澤三寿 の二番を語りまし 来』木遣り音 スが中止となった を 期 義 われまし 語 7々)の 太夫教 り <u>三</u> 頭の段 した。 発表を幕開きに、『 味 室 裏門 は、 線 卒業生は、三 た。 ス F S 汐 各 ŧ 行指 0 コ 五. \mathcal{O} ロナ の 、 段 導:竹 名 に限定して (指 実践 禍 留 にて卒 本 味 『卅三間 越 コー 線 ょ 京 ŋ 竹 卒 業 開 本 ス

تلح を 第 を 受 七 断 け、 念。 兀 期 は、 実 昨年度に引き続 践 三度目 コ] ス は 0 開 緊 き入 催 急 準 事 八門 態 備 宣 中です。 コ] 言発 ス の 令 開 な

0 Ŏ 楽演

参 場 邦 ジ 目 和加小昨 ヤ を 兀 劇 年 ン 場 迎 六 演 \mathcal{O} え、 ル 年 に 中 邦楽演奏会」 \mathcal{O} \mathcal{O} お 止 つ 譜 第 V 口 を 0 ビーに て、 経 本や見台が ジ 口 7 ヤ 都民芸術フェー 目 は カン ル が 過 ら が勢 開 展 去 %えて五-催さ 示されまし \mathcal{O} 揃 プロ 11 ステ れ 目 す まし グラム、 十 る イ 口 た。 · バ 立 ル 劇

デジタル

化

のため、

0)

ŋ

づ

け

を

は

が

Ļ

内

夫

寿 盛 な 部 ました。 奏会で、 で 語 大人 \mathcal{O} 段 の 向 きゅう け 太夫 本 0 -駒之助 第三部 物 八協会から 語 で 鶴 澤 は 源 本 津 平布 親 越 孝• 賀 子 (寿) を 引滝 向 鶴 け 澤三 \mathcal{O} 演実 第

新 たな演目 今後も各ジャ きます。 や企 ン 画 来年もどうぞお歌画を取り入れ、第五 を取り りん統 れ、 的 な 演 楽し 百 目 回を みに。 目 中 を目に に、

スクラップブック 湊 太夫師

理したことがあ 会に寄贈され 前、 豊竹湊太夫師の りました。 師 のス ク 御 ラ 遺 ッ 族 から プ ブックを 義 太夫 整

ラシ、 は貼 5 容を分類 つてあ 昭 太 \mathcal{O} 公 ス 海 クラップブックは六冊 夫因 公 和 プロ 演 0 三四 協 チラシ、 (するというものでし りましたが、その グラム 会 年 一味線 公演 までの二百七十 は いのプロ プログラムでした。 の大半百六十 ほとんど女 グラムも 内二 で、 た。 枚 義)でした 枚ほ 百 ほ昭 二十 和二二. あ ど の資 りました。 そのチ は、素 -枚ほど が、 年 料 がか

ے

昭 協 で 和二五 0 た「人 太夫因 昭 年に 結 形 協 主としてプロ 浄 会とは、十 五. 旧 成)された組 在 瑠璃因協会」とは 義 Ħ. 太夫協会と合 に至っていま 年 織 0) ほ どが前 和 義 で 太夫 ず。 す。 併 L 別 ま そ 年三 義 て 0 組 で大阪に の後昭 太夫因 人たち 義 織 太夫 で、 月 ま + 0 言 さ 部

ま 太 夫協 定 期 会 公 公 演 を十 五. して 回 定 行 期 0 て 公 演 お り、 を お こな そ 0) つ 後 て ŧ 義 い

た。 会か まし - 六 回 回 あ ります。 出 5 た 竹 [を除くす 演者 から 湊太 \mathcal{O} (義太夫協 通算)。この の第十九 夫 \mathcal{O} 半 師 ~ 数 \mathcal{O} **協会公演** て 口 が ス 公演 一の義 男 \mathcal{O} ク 義 性 ラ 太夫因 記録を見 な の回数は 太夫協会 ツ のです。 プ ブ ッ 協 て 公 義 クに 会 今昔 驚 太 演 公 きま 夫因 が 演 は、 \mathcal{O} あ と 感 L 協 第 第 ŋ

++

11 つくま ま を 書 カュ せて 賛 助 会員 いただきました。 田 村 進

が

思

女流 義太夫七十年にあ たって

を聴く会のことで、水野がによってデジタル化され た。「本牧亭を聴く会」とは、SE れまでに十一回 聴く会のことで、水野が説明 本 本牧亭を 年三月、 で聴く会 我太夫節 開 記 かれました。 録 保 た女流 存会か 集 が 役 義 刊 5 を 太夫 Ι 行 **"**女 0 В さ とめ 0 流 Ι れ 録、工 ま 義 て、 音、房 L 太

三五. と連 年で で 盟 ŧ 記 L 皿こそが そ 年(一九 録集を作って改めて認識したの た。 時 今の から からですから、昨年でち女流義太夫という呼称が (五〇) に結成された女流 女流義太夫の原点だというこ Ĵ が、 定 うど七 着 義 太阳夫和 L た

 \mathcal{O} せ は、 て 頂く予 \Diamond 公演 年 流 定だった 義 が 中 太 月 夫 止 \mathcal{O} 七 に 女 な のですが、 +流 -年」と ŋ 義 ま 太夫 たの 題 演 緊 L 奏 で、 急 会 て お話で 事 態 \mathcal{O} 宣 しの

> た と お 思 ŋ ま L 7 簡 単 七 十 年 を ŋ 返 0 7

> > 4

竹本素 治各氏 人 ・ 表 乙女文楽 致 |表は竹・ 月二八日には、すみだ劇!各氏の助言と後押しがよ 六 協) 月、 守 力 流 女、二代竹本綾之助 美 義 女流 \mathcal{O} 雄 本 て 太 素女ですが 尽力するため 共演もありまし 夫 河竹繁 義 連 太 夫 以 俊・三宅 0 復 下 . 大き に 興 連 場 た。 61 部 と 12 か 周 成 後 7 太郎 +は、 0 作 さ 進 旗 たようです。 名 れ \mathcal{O} 揚 ま 育昭 が げ 貫百 守 出 L 成 和 た。 公 随 憲

二九年(一しこ)、公演のさきがけとなりました牧亭に進出、その後四十年に 十年に及ぶ本 た。 +**六** ~ + 牧 九 亭 日 定 期本

ところ] スで大会は十六回 が、 連盟の 実 務 開 かれ を担って ま 1 · た 二 代

- 盟第

口

の大会を開

催、

その

後、

月に

は三

越

劇

場

三月、女流 \mathcal{O} が 建 本 一綾之助 は 7 設 主に協 立され、 直し が急逝 を図るため、昭 義太夫競 和会時 ます。 昭昭 本牧亭を聴く会で公 代の録音 演会(の 和三四年十一月)、 和三五年(一 ち協 でした。 和 会と改 九 開 六〇) 称) L 制 \mathcal{O}

2 太 今 夫 た昭 夫協 日 公 義 和 に 演 太 兀 会 至は 夫 五. で五十 ります。 協 義 年 会の 太夫協会が (一九七〇) 六月、 社 連 寸 合 盟 法 計 + 主 人 化に伴 年、 七 催することに + 年で 協 和会十 任 意 女団流体 なっ 義だ

協 和 単 向 会 上して 時 代に なるとプロ が きま ぜ す が グラム 連 盟 0) 越 時 質 代 \$ -は 粗 デ 末

口 に

 \mathcal{O} 7 起

止

みませ

n

ま 内 協

た。心よりご冥福をお祈り

竹 当

会 玉

Ł

長年に

わ

ŋ 授、

大変に

お世

話

に

になった

道

敬先生

が、

六月四 た

日

にお亡くなりに

な

いたします

実

竹

內道

敬

£

計

報

元

立音楽大学

教

元

邦

楽連合会

代

表

で

な

لح

ま

三二年 L プロ グラム 九 五. が >多色 七 九 刷 月 ŋ に \mathcal{O} 第 な 0 九 回た 大の 会は カン ら昭

> で 和

グラム はんがだいが回け よ出の - (七 ŋ ŧ 女 なの ŧ 6 \mathcal{O} 流 0) -って下さったものでしょう。 ない 段 年) は は Ź っです。 一点 大量 目 太] のを見兼 まで」(昭 夫 記 クです。「 記念公演· しか見あたりません。「 に 0 おそらくプロ 残 って で ねて 和 会 あ は だよ」と高 俺だけ 三三年十二月 0 御 た 11 名手 、ます 贔 本 が 屓 グラムに 牧 本 が 判 \mathcal{O} 亭 忠 野 ŋ 高 公 臣 さん そ Þ 野 本 連 演 ---四 日 俊雄 \mathcal{O} 牧 VI ま 盟 \mathcal{O} 根 は で 亭 11 時 プ さ W 拠 手 中 進 代 口

電話83六一三七上野 広 小路 ₹ }

た す 緒 が、 にし 散 個 人 \mathcal{O} て 本 いら 牧 勉 強 亭 会 で し 気などに た かの で内

えして クの 意 、おきた 味 を、 にいと思 七 + 年 1 \mathcal{O} ţ 、ます 歴史の 見 さ れ 齣 るこの として 7 お]

ラシ う 様たなれのを プロ 見 女 境 な 囙 は 流 遇 カン 張 刷 ーグラム 派るもの で 0 年 技 \mathcal{O} たの 次は、「 ŧ 術 お \tau 師 <u>\f\</u> \mathcal{O} お \mathcal{O} では が 客 は が 派 進 苦 匠 本 いになり、 境 出 さん方の 様に芸を聴 残 あ 歩によって、 牧亭を聴 ります。 では 来ます。 ないでしょう っていない あり 情 近 く会」 今は ま 熱と、 年 初 す 7 \mathcal{O} 期 o プ うか。 が コ \mathcal{O} 頂 で \mathcal{O} 華 口 _ほこうとされ か。そのよう 録音 \Box 支えるお客 は 本 麗 グ ナ禍と なく、 さには ラム 若 牧 からも 亭 手 は月チ 公 \mathcal{O} 作 演 V

流義太夫研究 家 水 野 悠 子

竹 本 越 文化 庁 芸 術 祭賞 優

作 果 合 術 に 第竹 戦 曲 祭 演 目 賞 対 + に 本 j 楼 は 優秀賞(音 八 越 回 井原 門 る 孝 復 令 \mathcal{O} が 竹 段 曲 西 本 ٦ ٢ ح 鶴 昨 越 楽 いう 作 年 孝 近 部 度 . の + 松門 暦 門 画 (第 会 期 月 的 より を受賞 西 左 七 五 衛門 なも 鶴 五. 日 と近 鶴 口 に 作 澤 し \mathcal{O} 主 ま で 文 津 松 し 国 化 催 賀 L た。 0) 寿 庁 姓 L 爺 芸成た \mathcal{O}

В



「竹本越孝の会」演奏風景 左: 竹本越孝 右:鶴澤津賀寿

の

で行わが にし 7 台に 勝 S て、 で、 という物 海 プ 年 れ 「お 舟 レ L 兀 3 あ た 主 \mathcal{O} た 月 娘義 信 父 から る 演 ア 時 語 娘 は 代 娘 にです のため 太夫の 沢口 0) 劇 五 義 女 が 月 太 靖 房 放 小 に 夫に に 取 で 送 子 吉 カ 小 ŋ さんで あ さ \mathcal{O} け ·なる」。 吉 締 る 女 れ て、 と ま お ま り事 す。 $\frac{2}{N}$ お 信 江 天保 信 が ۲ 件 主 が 天 を 役 \mathcal{O} \mathcal{O} Η 改 肌 題 第 \mathcal{O} 小 期 脱材 革 五 ド

影所 で た 日 る ることに に は 晴 が 影 声 の時 順 娘 0 当 然、 礼 義 協 5 時 は お の語 我太夫ら. V 所 力 L 俳 に 別 稽 ŋ 歌 通うこととなりま < , なって <u>ت</u> ك <u>ك</u> <u>=</u> は 撮 古 作 依 カン 優 娘 以外 ŋ や口上など 録 ですぐに弾 頼 義 音に合わ 思 味線をお 当 L しく見えるように を 太夫が登 酒屋」 時 \mathcal{O} て 11 いる三人 11 ただき、 ス \mathcal{O} $\widehat{\Xi}$ ハタッ す。 様 子 せ 味 き 仕 稽 0 場 フ て 線 語 事 古 0 さ L す を た。 表 \mathcal{O} \mathcal{O} \mathcal{O} れるわけも は L 娘 わりを 昨 る たり、 夏、 現 皆 演 音 様 義太夫役の わ . と 撮 々。 で さ 技となりまし は け きて 私が入れ)、 λ 影 東 で、 舞台に 当 き 本 \mathcal{O} 映 努力も こと なく、 11 番 京 俳 た ŋ ま 都 \mathcal{O} 上 で 撮 撮 優 す で

ち 当 は で 7 なみに す。 い時、 K 棹 味 ラ 俳 金 中 優 線 7 具 木 出 \mathcal{O} で が 細 使 は 演 を に 用 な 工 が 11 L か 番 綺 文 た 久二 喜 麗 な、 h な 味 年線は で 小 密 11 ぶ は、 たの か 澤 に思 明 \mathcal{O} 私 駒 は、 記 が 清 さ購

- 4 -

(2021.7.15)

優と義太夫 目中村

搟

の門

っに

として精 成 後 駒 五. 0 と世に 進 目 歌 没後は初 舞伎を牽 . 認 若年にし めら 代 子引し 中れ た六代目 て 村 た 第一人者 吉 右 衛門 歌右 ط \mathcal{O} な 相 衛

に な い 義 が 太夫節 7、「阿 \mathcal{O} 0 記 古をしたという 憶 力 から 曲 をこな 旋 律 に す 話 ŧ ほは 詳しいという 楽器 T カコ 0 V

その後 と、「ゴ って舞 本格的 る市造は、 が さ の造 か合わ せた。 が 吉 ・「アラ、 . う 伝 , |本雛 右 舞台を勤 記な義 なかった。 属 チャ 転 心であ · 瑩 向 太夫と野澤八 説 我太夫節 八造は竹 が タメの多い歌右 |緑=えいろく) 痛 してきた野澤市 劇 ゴ 7ある。 め、 った チャ 寸 V わね…」と歌右 \mathcal{O} 市造もストレ が骨の 幕になって が 竹 本入りして 言 本 いなは 造 った は 髄まで沁みこんで を 身 を迎 に雛太夫 衛門 造を 歌 0 竹 W 間も 駄 舞 好 岡 な え ・スから 《夫は、豊澤廣石衛門が言ったな!」と肩を叩 衛 目 0 起 伎 み 太 . を 出 芝居とイキ なく 用 竹 カコ 夫 本に 6 لح L I される 酒を煽 没 文 竹 カン 楽 Ļ 転 澤 V L 座 向 仲

目れもな釈

から奮 易 たる覚 名岩は すことができず役を降ろさ 竹 さ 悟の合掌」で、 本入り初舞台 村 本 \mathcal{O} 格 調 的な義太 和を考え 服 に は ま す 八夫節 俳 姫 一戻り」 優 لح \mathcal{O} ع 0 信 ち 俳 れ 足 た。 に 右 頼 優 に \mathcal{O} キメ $^{\sim}$ 衛 さ 歌 \mathcal{O} そ 演じ れ右 門 刃 撥 ħ を

人的直な

ま るま 弾 でに きさ な 0 が う 5

のへ鳥類でさえ」や个振り上ぐる刃の下れ込まれた。録画で偲ぶことができる「山んの右に出る人はいないね」と歌右衛門たらあたしはいくらでも芝居ができる。 とき はこの二人の竹本に支えらはその顕著な例であろう。 この二人の竹本に支えられ たどこまでも \mathcal{O} \mathcal{O} 目 肚 居に合うよう 強いマカンは、「雛さん 続く甘 7 ζì な 味 たが、 んも考えんと語 段 (取りを い声 七 分」と 歌右衛 ,や、ここぞと 雛太夫の 付 け 門 \mathcal{O} る 声 鼻に 0 0 \mathcal{O} 開に惚 下」等 最 が て は歌 科 雛 盛 あ い掛 か瑩右 期 さ うか ら緑衛 0

め」と さん で教 たをそ なま 駄 中 ばいけない 演 か 歌 た な 右衛門 正 目 の舞台をやっているあ わる折に同行した。「こういうも 村 頭でばかり考えても、 技 ら生まれる演 勘三郎 の気にさせる 解を引き出そうとする姿勢 で 出 いうことであ \mathcal{O} 両立を心 しに 度も は、 対し、「こう が「合邦」の よ」と指 やつ 役の性根を深く掘 がけ 放技と、 で て 0 た。 右 批 導 て 伝 l 1 で それが り上 た。 統歌 歌 なたじゃ 玉手 た。 門 し しょ ても が 右 手」 筆 若 怖 を 衛 舞 う くて 体に 門 者 手 伎 歌 ŋ カン に い、具体なきゃだ 0 は な \mathcal{O} 右 \mathcal{O} \mathcal{O} 下 十出人な げ 訊 感 教 は 衛 俳 様 える 門 式 き心 お 優 た じ邸代けに的解 迈 L

わほ

け

巡

楽 \mathcal{O} 野 澤 松 之 \mathcal{O} 輔 復 を 活 相 狂 談 言 役 とし は 作 7 曲 大切 を 依 頼に

> として して 代 < \mathcal{O} \mathcal{O} 者 雛 作 太夫を は 品 苦労 を 世 に 活 て カコ 出 す L る。 が な 音 域 を た得 の意

よっ って 右 衛 五 現い て 門 代 た 目 在 継 承さ 中 行 芝 歌 わ村 翫 右 衛門 れ 福 れ 門弟 たが ること 助 が が 襲 0 確 三 が 名 七 7 少 直 代 代 L な 前 目 目 た を 梅 成 継 の病 花 を 得 ぐことに が 屋 歌型 念で ってし 江は、 5 まなに歌

とめ の下 には自 W 業 歌 劇 違 あは 夫 れ たと たし ま \mathcal{O} 右 場 た \mathcal{O} 9 人 演目に \mathcal{O} 分もやりたくなってしま 深 衛 架鴻 た 女 成 が いう。 お鍋 独自 門門弟の 雪を演じた。 蔵 池 は 駒 松 書 深 幸 あ 屋 之 調に変わり、 選んだ。 歌 武に 性を 雪 は芝翫の にさんとは 系 輔 \mathcal{O} 統 中 な 幼 \mathcal{O} 縁 村 時 向 演 れ 戚 0 歌 指 歌 寄 可 L 目 で 果 雛 江 導 江 贈 愛 違 を う」と あ がら 7 太夫から は、 は を によるも る 深雪 して 承 道 だ 七 勉強会で「 れ 八 いた歌 から 代 たの 歌 W な 「これ 目 な 談」 右衛 ほどなく で 前 中 6 لح 右 を 門 村 垂 ŧ 朝 ま が掛 玉

立.

は

_ 翫

右 見 到 衛 せ あ 門 太 ŧ る た 夫 き L 節 向 動 晩 ځ きませんか 年 なっ 高 は ぐさ 体 一芸 . 力 \mathcal{O} 的 関 そ ら…」と役 格 に 連 往 に を て 時 身を以 緻 余 \mathcal{O} 密 人が 配 の「人 だ 分 なか 0 が て 物 でき た 歌

敬 称 略 L ま た。

文

歌 伎 義太夫 太 夫 竹 本葵太

協会 正会員の主な動 き

和三年一月~六月

※中止・延期となった公演は×印

義太夫協会/義太夫節保存会主催公

「女流義太夫演奏会」

一月二十日 お江戸日本橋亭 (水) 昼公演 × で夜公演は中 伝承者研修 止 発表 年記

×二月二一日(日)義太夫協会法人化五〇周 念公演 紀尾井小ホール

六月二十日(日)お江戸日本橋亭五月二十日(木)お江戸日本橋亭四月二十日(火)お江戸日本橋亭 三月二十日(日)お江戸日本橋亭

「本牧亭を聴く会」

四月五日(月)お江戸日本 作橋亭

正会員主催公演(協会後援分) 依頼公演・協力公演 (*印)

おとぎばなしで楽しむ日本の伝 令和二年十二月五日(土)武蔵野芸能劇場 劇 ※前期分追記 統 音 楽」

「じょぎ」*お江戸上野広小路亭 二日 ×五月一・二日 三月一・

×二月一・二日 「ぎだゆう座」

*お江戸 上 一野広 小 路

兀

月一・二日、六月一・二日

第十回乙女文楽公演」一月二三 (土)・二四 (日) 川崎市国際交流センター

X 二月二十三日 十五回花のように香れ (火) 蕨市立文化ホールくるる 女流義太夫」*

> 第五〇回邦楽演 場場 奏会」三月二十日 主 玉

第五回

0

会」三月

六月

主

玉

7

文楽

立劇場小劇場

× 「第十八回はなやぐらの会~橋本治さん で~」四月四日(日)紀尾井小ホール んを偲ん

横須賀女流義太夫演奏会」五月八日(土) ポット 横須賀芸術劇場ヨコスカ・ベイサイド・ス

X 「第十三回 九日(日)内幸町ホール 女流義太夫 竹本土佐恵の会」五 月

第十五回花のように香れ 女流義太夫」*五 義太夫さらなる試み その三」六月九日(水 お江戸日本橋亭 月三十日(日)蕨市立文化ホールくるる

、普及】

義太夫協会主催教室

第七三期義太夫教

[実践コース(後期)]一月九日~三月六日(各 土曜 日)豊川稲荷文化会館

第七四期義太夫教室講師 竹本越孝・竹本越京・ 鶴 澤三 寿

Þ

〔入門コース〕五月~七月 中止

依頼事業

流館 二月二七日 (土) 港区立伝統文化交流

義太夫節事始め」主

催

港区立伝

統

文化

館交

運営】

事会 日 - 本橋 六月十 -六日 (水) ビジョンセンター

理

放送・ 放 映

◆NHK FMラジオ「邦 三月十日(水)『恋女房染分手綱』 鶴澤津賀花 一月十三日(水)『源平 段 浄瑠璃:竹本越 浄瑠璃:竹本土佐子 若 三味線: 布引滝』 楽のひととき」 実盛物語 \equiv 鶴澤賀寿 重の井子 一味線:

◆NHK ラジオ第一 ラジオ深夜便「鶴澤寛也 三味線:鶴澤津賀寿 六月十六日 (水) 『伊勢音 N H K 屋の段 浄瑠璃:竹本越孝 |Mラジオ「邦楽百番」四月十日(土 · 三味線: 鶴澤寛也頭恋寝刃』古市油 浄瑠璃 ツレ..

賀花 (月) ゲスト: 「にっぽ 鶴 澤 津

日(金)「蔵出し!名舞台 時代のさき、NHK Eテレ「にっぽんの芸能」四月二五日(日)ゲスト:鶴澤津賀花・下Mブルー湘南「ツーラインズ・トリッ・ ゔ

浄瑠璃に生きた女性たち」女流義太夫初の 野 人間国宝、竹本土佐廣を紹介。『新版歌祭文』 團生) ほか。 崎村の段(三味線:鶴澤寛 BS時代劇「小吉の女房2」(5) 時代のさきがけ 八、 ツレ:鶴 四月三十

N H K 撮影協力:鶴澤駒清 「お信、娘義太夫になる」四月三十日(金)

出 版 物

女流義太夫 本牧亭を聴く会 記 録集』(義 太

(2021.7.15)

正

主

公演

(協会後援分

依頼公演・協力公演

(*印)

「じょぎ」*

お江戸上野広小路

亭

七

月

記録 二〇〇九年から一般公開されてきました。 一九 +亭に 節 討 部 の 八八九 してまい 集が刊行されました。 寄贈されましたので、 記 保 録音 おい 存 流義太夫 会) 年度に 源 て開 成 ります。 から、その一部をデジタル 元 九 義太夫節保存会から会の 催された女流 本牧亭を聴く会」として 五. 年 ま で、 (昭 義太夫協会へ三 今後の活 和二六) 東 京・上野の 義 太 大夫演 旧法を 年 カン 化 奏 本 5

{り芸パースペクティブ』 立(社) 竹 本駒之助 . 鶴 宝 澤 Ш 寛 奈 批 Þ 福 編

会 • 正会員の今後の動 ŧ

令和三年七月~十二月

依頼事業

八日

義太夫協会/義太夫節

保存会主催

公

公演

女流義太夫演奏会」

七月十八日

(日)

義太夫協会法

人人化

Ŧi.

+

周

語ってみよう! 校 井 島 演事業--」(制作: 化芸術による子供育成総合事業 (火) 三次市立吉舎中学校、 中学校、 市 立城山中学校、 十九日 義太夫節!」文化庁 古典空間) 十一月十六日供育成総合事業―巡回公 (金) 十八日 宇部市 (木) 十七目 <u>\frac{1}{1}</u> Ш 光 (水) 主 市立 上 催 中 光広

運 営

十月二十日 (水)

お江戸

月

十一月二十八日

(日)

国立

演芸 本橋

一月十九日

日)

紀尾井小

ホ

1 場 亭 亭

ル

九月二十日

(月)

お江戸日本橋 お江戸日

本橋

八月二十日 (金)

-記念公演

紀尾井小ホール

ジョンセンター 年度通 常 日 総 本 七 月二 日 (木) ピ

ぎだゆう座」 一・二日、十月一・二日、十二月一・二日さだゆう座」*お江戸上野広小路亭 八月 ル 口 [花の会] 八月二七日 (金) 内 幸 町 ホ

日

九

月一・二日、

+

一月一・二

日

第十三回女流義 第十六回花の 月二四日 月十七日 (日) ように 太夫 竹本土佐恵の 蕨市 香 立文化ホールくるる れ 女 流 義 太夫」*十

、普及】

義太夫協会主催 (水) 教 室 内幸町 第 七三 ホ Ì 期 義 太夫教 会」十 室 曜

大阪女義復興プロジェクト二〇二一「義太夫 豊川稲荷文化会館 実践コース九月 体験教室」主催:瑠璃の会 (日) 大阪・高津宮 四 日 ~三月 末広 十九 八月七 \mathcal{O} 日 間 **(**各 日 (土) 土

●義太夫協会 運営事務アルバイト募集●

年齢:45歳くらいまで

時間給:1050円(昇給あり)、交通費実費支給

勤務地: 当協会事務所(東京都中央区日本橋本町)他 勤務日時:週2~3日、通常コアタイム10時30分~ 16時30分のフレックスタイム制

別途演奏会等で平日夜・土日祝日の勤務もあり

仕事内容:義太夫教室・演奏会関連業務、経理事務、 助成金・補助金申請・報告書作成、法人運営業務等

その他:ワード、エクセル、インターネット作業等、 PC操作ができる方

お問い合わせ:電話◆03-6265-1880

メール◆am-giday@gidayu.or.jp

寄 付 靐 贈

に 有難うござい 記 0 寄 付ご寄 まし 贈 を 頂 戴 V た L まし

寄贈 付 金 木陽

様

竹 本 式 駒 之 助 鶴 澤 \equiv 生ス クラッ ブ ツ

野昌 部洋 |要資料電子化 京二郎 行氏ご遺族 子 様 様 鶴 撥、 澤三 式 稽 見 生ス 古 台 本、 クラッ レ コ コ 1 プ ド ブ K. 他 ツ ク

今

田

会報編集委員/鶴 鶴 澤 津 賀花 竹 澤 本駒佳 . 寛 也 竹 本佳 竹 本 越 之 里 助

義太夫用三味線・張替、水牛駒・見台・湯呑、 制作修理 その他、各流三味線及び付属品 の御注文承ります。



*

de

ら

〒151-0066 東京都渋谷区西原 1-26-14 TEL/FAX 03-3466-2156 P.H.S 070-5457-5687 kimura-wanoshirabe@nifty.com 紋付 肩衣 袴 一式承ります

すいこう苑

コバヤシ

〒343-0044 埼玉県越谷市大泊249 TEL 080-1155-3942 FAX 048-975-2179

MAIL m-24-kobayashi-718@docomo.ne.jp

よろしくお願いいたします。まさに「継続は力なり」。まさに「継続は力なり」。

一九六三年発足



日本素義会

熱い思いに支えられてきました女流義太夫のみなさまの素義の先輩諸氏、そして

和

成

令和と



示谷の演芸場は

日本の伝統芸能を応援しています

- ◆お江戸日本橋亭
- ◆お江戸上野広小路亭
- ◆お江戸両国亭
- ◆新宿永谷ホール (Fu-)

永谷商事株式会社

10422(21)1796

公式 HP:http://www.ntgp.co.jp/

